

史の亂を界として、漸く衰頹期に入つた、いわゆる中唐頃ともなれば、欽定の經義に對して公然異見を唱えるような者も現われれば、韓愈（退之）やその弟子李翱（リコウ）のように、訓詁學そのものに反對するような者も出て來て、學風の變化を認めることができるが、未だ大勢を動かすまでには至らなかつたというのが事實である。

**文學** 兩漢時代には、恰も經學の從屬物であるかの如くに扱われていた文學は、魏晉以來漸くその桎梏を脱し、その後は反動的に、内容よりも形式、精神よりも技巧を重んじ、いわゆる修辭主義文學の發達を見るに至つた。纖細華麗な駢文（べんぶん）は、後漢の頃に萌芽し、魏晉の頃愈々盛んとなり、南朝の齊・梁の間に至つて、遂にその體が定まつたが、これは中國文學における代表的な修辭主義文學と言つてよい。

この浮華な南朝の作風は、やがて北方をも風靡しようとする勢にあつた。隋の文帝は、北朝の質樸な好尚によつて、一時はこれを改めようとさえ計つたが、全くその效はなかつたと傳えられる。修辭主義文學の餘勢は引續き次の唐代に及んだのであつた。殆んど唐一代を通じて變化のなかつた駢文の盛行と、初唐における律詩（近體）の成立は、これを物語つていゝであらう。

もつとも修辭主義文學の行きづまりから、初唐以後漸く古詩・古文への復歸思想が起り、盛唐・中唐の頃にはこれが主潮となつて、古今に冠絶する唐文學の爛熟期を出現した。杜甫（子美）・李白（太白）によつて代表される詩、韓愈・柳宗元（子厚）によつて代表される文は、形式よりも内容を重視した北方文學と内容よりも形式を重視した南方文學との眞の統一が、この頃に至つて始めて成つたことを示していると言つても差支えあるまい。しかも晩唐時代には再び修辭主義文學に墮し、以て宋初に及んだのである。